中学校英語における定型表現と指導上の効率に関する試論（1）
― 語レベルと句レベルの認識について ―

加藤 コラゾン ・ 下 内　充・ 服 部 吉 彦

Proposals to Teach Pre-service Teachers to Effectively Handle English Idiomatic and Formulaic Expressions in Junior High School English Textbooks (1)
― Phraseology in Junior High School English ―

Corazon KATO, Mitsuru SHIMOUCHI, and Yoshihiko HATTORI

研究紀要　第24号　別刷（2023年３月）
中部学院大学・中部学院大学短期大学部

Reprinted from THE JOURNAL of
CHUBU GAKUIN UNIVERSITY, CHUBU GAKUIN COLLEGE
No.24 : 69－75（March 2023）
SEKI, GIFU, JAPAN

中部学院大学・中部学院大学短期大学部　研究紀要第24号（2023）69－75

研究ノート

中学校英語における定型表現と指導上の効率に関する試論（1）
― 語レベルと句レベルの認識について ―

Proposals to Teach Pre-service Teachers to Effectively Handle English Idiomatic and Formulaic Expressions in Junior High School English Textbooks (1)
― Phraseology in Junior High School English ―

加藤 コラゾン[1)]・下内　充[1)]・服部吉彦[1)]
Corazon KATO, Mitsuru SHIMOUCHI, and Yoshihiko HATTORI

抄録：現行の中学校英語検定教科書内における使用語彙と熟語などの定型表現を、基本語の訳語と場面依存の強い句レベル、文レベルの表現との語義的関連を調査し、教育学部の学生に確信的に把握できる基本語の定義と機能的意味を抽出することにより、中学校での英語指導現場での指導上の効率を高める指針を提案する。本稿では、中学校の英語教育に求められる方向を展望し、小学校からの接続の一実践例を見たうえで、英文法という英語の知的枠組みを与えられる中学校レベルの課題を、句レベルの解釈と基本語との関係、語句の理解を深める方略の一部を示し、考察した。

キーワード：中学校の英語、基本語、定型表現研究

1．英語学習の目標と内容

1.1　中学校外国語科の目標及び内容について

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語編』には、外国語科の目標として、「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育成することとなっている。

また、「外国語で表現し伝え合うために、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりを整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」と考えられている「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせ、「聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと」の言語活動を行うことが大切にされている。

このためには、

・外国語の背景にある歴史や文化の理解とその相手への配慮
・コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じた考えの形成や再構築
・適切な言語材料の活用
・言語の役割の理解
・伝え合うという双方向のコミュニケーションの重視
・小学校での学習との接続への留意

等が重要な視点であると考える。

そして、学習指導要領解説には、上記の目標を基に、育成を目指す資質・能力の三つの柱に関わって、次のような目標が設定されている。

「知識及び技能」

（1）外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。[1)]

「思考力、判断力、表現力等」

（2）コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。[2)]

「学びに向かう力、人間性等」

（3）外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。[3)]

とある。

1.2　中学校英語の実際について

これらの具体的な実践として、ある中学校の１年生の授業を2022年11月に参観した。この授業での言語活動や言語材料の目標は、(4) 話すこと［発表］の「イ 日常

1）教育学部子ども教育学科

的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする」に重点が置かれていた。[4)]

授業者は、ICT を活用し説明をする活動を行わせながらも、その中で、“Oh. I see. Do you like～?” などの反応ややり取りをする伝え合う活動や、自分の発話した英文を書きまとめる（箇条書き）活動など学習過程の中で、複数の領域を効果的に関連付け、統合的な言語活動を組み立てていた。

授業の中で、生徒たちは、タブレットを使い写真を見せ、やり取りを行いながら発表をするなど「コミュニケーションの目的や場面、状況等に応じて、表現内容・表現方法を工夫して、粘り強く考えや気持ち、情報等を伝え合い、英語でコミュニケーションを行っている」姿であった。

この単位時間の授業については、タスクとして「ALT の先生に自分のお薦めの国の魅力を紹介しよう」と設定されていた。これは、「世界の問題と地域の問題の現状に対して、自分の気持ちや考えをもつという」教科書題材と関わらせたとき、最初に生徒たちが世界の様子について情報を収集して説明する必要性を考えたからである。

この授業での学習過程は次のようである。

① Small talk：小学校５年生で学習した want to ～の文型を使いながら、先生と生徒で問答をする。
② Listening Time：ALT の冬休みの生活で「プランが決まっていない数日間海外にいきたいがどこに行ったらいいだろう」という対話を聞かせる。
③ 課題の提示と練習：本時のタスク「ALT の先生に自分のお薦めの国の紹介をしよう」を示し、ALT に紹介するために練習をする目的を示す。
④ ICT（タブレット）にあらかじめ各自で用意した海外の写真を見せながら、数名のペア間で説明をする。
⑤ Sharing Time：さらによくするための語句や表現を交流する。
⑥ 再度ペアを変えながら、語句や表現を工夫しながら伝え合う活動をする。
⑦ ALT の先生に、お薦めの国の紹介をし、ALT との間でやり取りを行う。
⑧ Writing Time：説明した英文を箇条書きで書きまとめる。

このような学習過程をふみながら、生徒個人の説明や対話能力の向上を図った授業であった。

④の段階で、生徒たちは、自分の用意をしてきた、カナダ、アメリカ、ノルウェーなどの国の特徴や食事、有名な場所などを説明した。“I went to go to Canada. It is very beautiful country.” のような誤りもあったり、説明に際して、反応や問いかけ、問い返しもなかったりした状態があった。

しかし、⑤の段階では、④の中で見つけた内容として、教師が、“I want to～.” が示している意味とその発音の確認や、生徒が使っている表現の “It’s delicious. It’s sweet.” などの反応の仕方、“Do you like ～ ?” といった問い返しの表現方法などを確認する時間をとったことにより、⑥の段階では、生徒たちの対話に、“Oh, I see. Me too. Do you like ～? How about you?” といった気持ちを述べたり、相手からの質問に答えたりといった自分で考え工夫した「やり取り」を入れる多くのペアがあり、各自も自分の変容に気付き、より積極的な言語活動の時間となった。

この中学校１年生の英語授業では、小学校で実際に使ってきた英語表現（小学校５年生には “What do you want to be? I want to be a (baker).” などと want to ～を使った活動がある）を違った話題でも使えるように、上記のような言語活動が仕組まれていた。小学校でも、文字が示されていた時はあるとは思われるが、この中学校での授業では、意味内容と違った発音の誤りが見られた。

そのことから、中学校では、文字と音声の関係や語句や文構造に着目をさせながら、より正確に英語表現を使う習慣をつくっていく必要性を感じた授業であったし、授業者が小学校での学習状況を意識して授業を組み立てていく必要性も感じた。

授業を参観した中学校１年生の生徒たちは、小学校において、１年生から６年生まで、英語活動及び英語の授業を受けてきている。低学年は、年間10時間、中学年は年間35時間、高学年は年間70時間であり、１単位時間は45分である。小学校では、「自分のことや身近で簡単な事柄について、伝え合う言語活動を行うことを通して、特に、聞くこと・話すことに慣れ親しんできた」のである。小学校低学年の場合、話題が身近であることが優先された題材シラバスでの構成となっていたことから、たとえば、小学校１年生で、果物を話題としたときに使用した言語材料は、“What fruit do you like? I like apples.” といったものであり、名詞として、フルーツの名前を多く学んできたのである。これらの簡単な語句や基本的表現は、文字を介さずに行われており、音声重視となっている。その状態は、英語の音声やリズム、イントネーション、音の強弱等に慣れ親しむことに重点が置かれている。このような中で、活字体で書かれた文字と音声との結びつきについての文字認識力の育成については、学校により取組内容や状況に違いがあるが個人差も配慮しながら進められてきていると考えている。

また、言語の使用については、“Hello. How are you? I’m fine. I’m sleepy.” といった挨拶や “What vegetables do you like? I like tomatoes.” といった食事に関わる場面など、言語の使用場面や働きにも留意されている。題材については、生活科、音楽科など他教科等で生徒たちが学習してきた内容と関連付けたり作成したりした物を活用した教科横断的なものとなっており工夫された指導計画となっている。[5)]

1.3　小・中学校の学びの接続及び連続性から

小学校学習指導要領では、中学年（第３学年及び第４学年）外国語活動の内容〔知識及び技能〕(1) 英語の特徴等に関する事項では、

イ　日本と外国の言語や文化について理解すること。

（ア）英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと

とあり、その解説の中に、「外国語においては、多くの表現を覚えたり、細かい文構造などに関する抽象的な概念について理解したりすることを目標としない。一方、音声面に関しては、・・・英語の音声やリズムなどに慣れ親しませることが大切となる。」とある。[6)]

また、高学年（第５学年及び第６学年）の外国語の内容〔知識及び技能〕(1) 英語の特徴やきまりに関する事項では、

実際に英語を用いた言語活動を通して、次に示す言語材料のうち、１に示す五つの領域別の目標を達成するのにふさわしいものについて理解するとともに、言語材料と言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けることができるよう指導する。

とあり、その解説の中に、「外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする」とある。[7)]

この目標は、これまでの高学年の外国語活動が充実してきた中で、次のような課題に対するものである。

①音声中心に学んだことが、中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない。

②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある。

③高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められる。

等である。[8)]

英語の文字や単語などの認識、日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き、語順の違い等の文構造への気付きなど、言語能力向上の観点から言葉の仕組みの理解などを促す指導が求められるとされている。語順を意識しながら音声で十分慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現について「語順を意識しながら書き写す、例文を参考に書くことができる」などの基礎的な技能の習得を目指し、英語では意味の伝達において語順が重要な役割を担っており、英語の文構造を理解させるために、語の配列等の特徴を日本語との比較の中で捉えて指導を行うとされている。[9)]

また、英語の表現については、意味を把握したり、活用したりはするが、「代名詞」の用法、「動名詞」の用法について理解し活用するのは、中学校の段階ということである。[10)]

英語特有の語順や文、文構造及び文法事項など言語材料について、中学校では、早い段階で、小学校で学んだ表現を取り上げ、読んだり書いたりできるようにしたり、使い方の理解を深めたりしながら、別の場面や異なる表現の中で活用できるようにすることが大切となる。[11)]

中学校の外国語科における「知識及び技能」の目標には、上記したように、「・・・語彙、表現、文法、言語の働き・・・」と「文法」が加えられている。

そして、内容の項目で〔知識及び技能〕のところでは、言語材料を「英語の特徴やきまりに関する事項」として、「音声」、「符号」、「語、連語及び慣用表現」及び「文、文構造及び文法事項」と整理されている。

音声、語彙、表現、文法、言語の働きなどの個別の知識については、どれだけ身についたかではなく、それらを理解し、「実際に英語を用いた言語活動」において活用し、主体的に運用する技能が習熟・熟達に向かったり、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて知識が獲得され、学習内容の理解が深まり、学習に対する意欲が高まったりするなど、三つの資質・能力が相互に関係し合いながら育成される必要があるとされている。[12)]

小・中学校の学びの接続及び連続性の観点から、様々な言語活動を工夫し、言語の運用能力を高めることが求められているのである。

そういった中で、中学校の役割として、生徒たちが、身近な人・ものを題材として慣れ親しんできた英語表現の正確さ（accuracy）について、生徒自身が意識できる発達年齢となる中学校での英語学習は、正確さも意識したものとなることが重要であると考える。

そして、小学校においては、音声、語彙、表現などについて、授業者は言語を使用する場面でより適切な言語運用を意識することが重要であると考える。

現在の中学校での英語の授業時数は、年間各学年140時間、３年間で計420時間（１単位時間は50分）である。年間35週で授業が行われることから、週４時間が英語の時間に割り当てられている。

外国語（英語）の学習を行う際に、教科用図書が活用されていることから、今回は、岐阜県で活用されている教科用図書を、特に、「文、文構造及び文法事項」等に焦点をあてて調査をすることで、限られた時間の中で英語を学ぶ学習者が中学校での英語学習の役割である正確さをどのように学んでいくのか、また、どのように指導をすることが、生徒たちの言語運用に効果をもたらすのかを考える。

2．句レベルの解釈とは

文法事項に含まれる中で単語レベルの意味は容易であるように思われるかもしれないが、特に基本語の意味をとるのは必ずしも容易ではない。これは、対応する日本語の訳語で納得することができる場合も多いからであるが、中学生で語彙を扱う場合はまず基本的な意味を覚えるという方策は避けて通ることはできない。次のような文はこの基本的意味に対応する例で生徒が意味をとるのは難しくない。[13]

Can you see the gym?（NH 1-16）

この文は、一語一語でそれぞれ切れ目さえ見失わないなら、そのまま日本語に対応する言い方である。[14]

できる　君は　見る　体育館を？

それに対して、前節にあった「want to + 動詞」のような例では名詞用法の不定詞という説明により

欲する　～することを

から、「～したい」への移行はほんの少しの調整で納得できると思われる。（I want an apple.「リンゴが欲しい」のように「～することが欲しい」は理解できるとしても、日本語では「欲しい」は行為を対象にしない。）

しかし、基本語のひとつ、take は「とる」と理解しているはずであるが、それほど単純ではない。

I will take you to the zoo.

では、人間を「とる」、となると語レベルでは説明できない。辞書に「連れていく」の語義が入っているのは句レベルの語義であって、英語では「人をとる/つかむ」ところまでしか言葉にしていない。ここに2語以上の連動関係、ある種の句との共起関係を認識する必要がある。

New Horizon English Course 3 では、

I'll take you there and pick you up.（3-60）

Shall I take you there?（3-67）

など、there「そこに」連れて行く、という例が使用されているが、指導者は「take + 人 + to 場所」の構造を把握しておくべきであり、前置詞句の方からの説明が求められる。

このような句における基本語の訳語の変化に関して、母語話者は連語関係をそこに認識していないが、日本語の学習者は日本語の事情で「take + 人 + 場所」の枠では「ある場所へ、ひとをとる」とは表現しないことを知っていて、その「場所まで」「（自分も）行く」と補足して表現することになる。ここでは語の意味だけではなく句の用法としての（定型表現的）視点があると言える。

したがって、目的語が「ひと」なら「連れていく」、「もの」なら「持っていく」という句レベルの日本語に関して、英語では「連れていく」行為の最初の部分だけを言語化している、という理解の上に、（自然な日本語に表現する際には）この訳語を覚えておくことも必要と考えられる。

3．熟語・連語表現の不明快さ

3.1　補語としての前置詞句

小学校から馴染みの頻出表現のひとつに（岐阜出身の場合など）

I am from Gifu.

があるが、この意味は前節で挙げた一対一対応関係では「訳出」できない。「be from 出身地」という句として、「ある場所の出身である」と説明されるが、主語が人間の場合は次の表現はおかしい。

？　私は　岐阜から　いる。

？　私は　岐阜から　である。

一部の辞書に記載があるように、（前述のように辞書は句レベルの訳語も取り込んでいるので）「来る」「行く」をここに読んで[15]（しかも日常的・状態的叙述では日本語は「ている」で表すとして）

私は　岐阜から　来ている。

も可能ではあるが、ここでは教える側の文構造に関する知識を援用して説明することができる。

すなわち、状態性を表す前置詞句は補語と解釈する。補語はそれがかかわる名詞（句）を（SVC の場合は S を、SVOC の場合は O を）説明するものととると、

I am（someone）from Gifu.

私は　岐阜の人　である。

といくらか無理な表現になるが、これは、日本語には形容詞句を作る助詞は「の」しかないので、[16] 英語の多様な前置詞句表現もすべて「の」で訳出することになるためである。（ただし、日本語では動詞の連体形で名詞とつなぐことで回避する。）

このような補語の句は中学校の教科書にも頻出するが、動詞を補うことで日本語の対応表現としている。すなわち、「岐阜から来た（人）」の中の from の意味を be 動詞に持ち込んで、次の文では「私は～から来ました」のように説明する場合も必要かと思われる。（be の意味が「行く・来る」になるのは転移ということになり、このような例は英語には多い。）

I am from China.（NC 1-18）

I am from London.（NC 1-20）

I'm from Australia.（NH 1-13）

She's from America.（NH 1-20）

さらに補語としての

The song is in English.（NC 3-6）

のような句も「その歌は英語の歌です」という読み方が日本語としては自然な解釈と言える。これは母語話者にも潜在している意識であって、文法書などでは補語としての形容詞を「間接的な説明」[17]と解説している。[18]

出身の例に関して「直接的な説明」（形容詞修飾）として

It's a popular food from Mexico.（NC 1-86）（it はタコスのこと。）

I'm Riku from Japan.（NC 1-120）

も使用されていることから補語としての転用意識も作りやすいと考えられる。

3.2　定型表現内の目的語の省略

前節で見たような言語の表面に出ていない名詞を補う形での定型表現解釈の方策は多くの慣用表現を取り込んでいる中学校の英語教科書で有効である。

名詞の脱落の可能性は、文構造から容易に予想がつく。次の４つの可能性がある。

1　SVC の補語句内の脱落
2　SVO の目的語の脱落
3　SVOC の目的語の脱落
4　前置詞句の目的語の脱落（副詞化）[19]

3.2.1　動詞 get の自動詞化

すでに、１については前節で扱ったので動詞の目的語の脱落による定型表現の例を get の自動詞化に見てみたい。

次の例は get を「着く、到着する」の訳語から解釈できる。

I got to school at 7:50.（NH 1-115）

We need to get to the stage.（NH 1-90）

しかし、

How can you get to ABC cake shop?（NC 1-107）

では、訳語は「行く」とするしかない。また

At last Peter got home.（NC 2-13）

の例では視点が家にあるため「来る」という感覚が日本人にはある。また

Lucky got back into positon and stepped into the air.（NC 3-67）（ラッキーはカモメ。）

となると、上記の訳語からではなく、get into position「位置につく」に back が割り込んでいる構造を読みとる必要がある。（「ラッキーは、元の位置に戻って、空へと飛び出した。」）さらに、

He often gets into trouble.（NC 2-6）

となると、熟語として、外から見ると「面倒を引き起こす」、主語に同情すると「困ったことになる」と読みとる必要が出てくる。

またすっかり慣れている表現としては、get up early「早起きする」のように get の意味が希薄化しているものも小学校から使用される。

ここでは、２の構造の目的語の位置に主語の再帰形 oneself を読むと「自分をある場所・状態にもっていく」と解釈出来て、中学生の理解力で十分に対応できると考えられる。

3.2.2　第二文型内の get の理解

同じような考え方で他の文型も理解が深まる場合がある。上記 3、4 について同類の考え方について簡単にふれておく。例えば

get ready（NH 3-56）

get well（NH 1-123）

get married（NH 1-123）

では、SVC と理解できるのと同時に高校レベルでの学習にも備えて、目的語の oneself を間接的な仕掛けとして知っておくのも有効であろう。４の例では句動詞とも関連するが、

beat in egg and vanilla（NC 2-15）

turn it in（NC 2-62）（it は宿題）

など in の後に、文脈からそれぞれ、料理の際に使用するボール、受け取る側の手を補うことで理解は容易になるはずである。[20]

4．今後の課題

単純に熟語として基本語（の訳語）から切り離すのではなく、基本語の母語話者の定義としての意味把握を考慮することも必要であり、語義の数を限定することで中学校レベルの学習はもっと明瞭に、論理的に説明する方策も求められる。前置詞句の意味構造、句動詞の解釈など、中学校の教壇で有効な方略について探索することも必要である。このような句レベルの構造と解釈、用法の指導法も含めた定型表現研究（phraseology）として、中学校教科書内での効率を考えて、今後の共同研究の一環としたい。

注：

1．文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語編』（平成29年7月）、p.12.
2．同上、p.13.
3．同上、p.14.
4．同上、p.25.
5．文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語活動・外国語編』（平成29年７月）、p.35 及び p.46.
6．同上、p.26.
7．同上、p.83.
8．同上、p.70.
9．同上、p.71 及び p.82.
10．同上、p.92.
11．文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語編』（平成29年７月）、p.48.
12．同上、p.29.
13．文例の後の略号は参照した教科書とそのページを示す。NH：*New Horizon*、NC：*New Crown*、1-12：１年生用、12ページ、など。

14. 日本語の文に出てくる「は」と「を」は英語にはない部分ではあるが、これは英語の構造（主語＋述語動詞＋目的語）が決める要素であるので本稿では扱わない。
15. 日常使う表現に多く見られる。I'll be back in a few hours.（NC 2-66）など。
16. 例えば、金田一春彦『日本語』（新版・下）、p. 86。
17. 安藤貞雄『現代英文法講義』（p.473）など。
18. 他にも次のような句が使用されている。日本語としては、どれも補語の名詞を補足するのが望ましい。
    The original version is by Ben E. King.（NC 3-6）
    元の曲はベン・E・キングによるものです。
    It［The book］is about friendship.（NC 3-73）
    それは友情に関する本です。
    It［The symbol］is for "shrine."（NH 1-23）
    その記号は「神社」を表す記号です。
19. 歴史的には逆の現象が見られるがここでは便宜上、脱落という考え方を採る。すなわち前置詞の発達には、名詞の屈折語尾の弱化を補うためにその前に副詞を置いたのが習慣化したという過程が含まれる。
20. 不変化詞（particles）は別稿として扱う予定。

参考・引用文献：

安藤貞雄　現代英文法講義，開拓社，2005
井上亜依　英語のフレーズ研究への誘い，開拓社，2019
金田一春彦　日本語（新版・下），岩波書店，1988
文部科学省　中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語編（平成29年７月），開隆堂，2018
文部科学省　小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語活動・外国語編（平成29年７月），開隆堂，2018
L. Selivan, Lexical Grammar―Activities for teaching chunks and exploring patterns, Cambridge University Press, 2018

参照教科書：

笠島準一ほか，New Horizon English Course 1 ～ 3，東京書籍，2021
根岸雅史ほか，New Crown English Series 1 ～ 3，三省堂，2021

Proposals to Teach Pre-service Teachers to Effectively Handle English Idiomatic and Formulaic Expressions in Junior High School English Textbooks (1)
― Phraseology in Junior High School English ―

Corazon KATO, Mitsuru SHIMOUCHI, and Yoshihiko HATTORI

Abstract : In junior high school English classrooms, Japanese teachers tend to rely on the Japanese equivalents for English words as if each word has a one-to-one correspondence of meaning. Similarly, formulaic expressions like idioms and fixed phrases are expressed in fairly different Japanese phrases as translations. This kind of memory-loaded learning puts pressure on EFL Japanese learners resulting in poor motivation, even if their vocabulary increases. There is a need to give pre-service teachers some tactics to connect those phrasal expressions and the meanings (definitions) of basic words. A few ideas to apply to the structures of the SVC sentence pattern and phrases with the verb *get* are proposed here. Other important categories to consider are prepositional phrases and phrasal verbs. It is imperative that teacher training should include this kind of phraseological research, and educators have to find effective synergetic strategies which go along with the knowledge acquired while the students are in elementary school.

Keywords: English in Junior high school, basic words and meanings, English phraseology